

分子標的薬の利益倍増のカラクリ

抗腫瘍剤で最も稼げているのは免疫チェックポイント薬であるが、その次は分子標的薬である。

2024年 国内医療用医薬品売上高上位10薬効

売上高は薬価ベース

順位	薬効名	売上高 (百万円)	前年比 (%)
1	抗腫瘍剤	1,970,622	1.7
2	糖尿病治療剤	758,110	6.1
3	免疫抑制剤	640,148	4.8
4	全身性抗ウイルス剤	444,058	▲ 7.8
5	抗血栓症薬	439,228	1.6
6	眼科用剤	342,242	▲ 4.5
7	ワクチン類 (トキソイドを含む)	339,038	44.1
8	診断用検査試薬	317,422	▲ 11.9
9	その他の治療を目的とする薬剤	303,993	12.3
10	喘息およびCOPD治療剤	294,129	3.8

AnswersNews IQVIA医薬品市場統計をもとに作成

2024年 国内医療用医薬品売上高上位10製品

売上高は薬価ベース

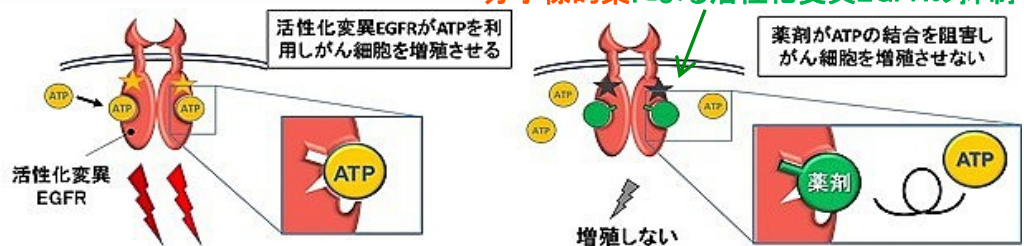
順位	前年	製品名	社名	売上高 (百万円)	前年比 (%)
1	2	キイトルーダ	MSD	185,160	16.2
2	3	リクシアナ	第一三共	147,729	12.3
3	1	オプジーボ	小野薬品工業	144,582	▲ 13.0
4	5	タケキャブ	武田薬品工業	120,060	3.9
5	—	デュピクセント	サノフィ	117,665	51.4
6	7	タグリッソ	アストラゼネカ	109,921	1.1
7	6	イミフィンジ	アストラゼネカ	108,560	▲ 1.1
8	9	フォシーガ	アストラゼネカ 小野薬品工業	100,432	22.2
9	8	アイリニア	バイエル薬品 参天製薬	93,923	5.8
10	4	ラゲブリオ	MSD	93,473	▲ 27.0

AnswersNews IQVIA医薬品市場統計をもとに作成

免疫
免疫
分
免疫
(免疫…免疫チェックポイント阻害薬 分…分子標的薬)

- ・タグリッソ(一般名:オシメルチニブ(Osimertinib))は、肺がん全体の約85%を占める非小細胞肺がんの治療に広く用いられる分子標的薬である。
- ・分子標的薬の種類は多く、タグリッソが用いられるのは、採取したがん細胞の遺伝子を検査してEGFR(上皮成長因子受容体)遺伝子に活性化変異が見られた場合(肺がん患者の半数以上)である。(現在では、T790M変異だけに限らず、多くの場合の一次治療から用いられるようになった)
- ・がん細胞のEGFR遺伝子に活性化変異があると、がん細胞の細胞膜表面に存在するEGFRにEGF(Epidermal Growth Factor; 上皮成長因子)などのリガンドが結合しなくても細胞増殖が促される。そのため、がん細胞のEGFRにリガンドが結合しないように分子標的薬にて細工してやれば、がん細胞は増殖を止めるであろうとする発想である。

分子標的薬による活性化変異EGFRの抑制



人間による攻撃に応じて次々と変異していく

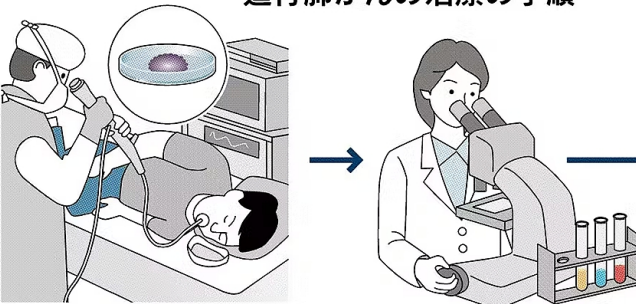


・増殖をしばらく阻止できたとしても、がん細胞を殺傷できないことは百も承知である。しかし目的は、薬を売って利益を上げることである。

・一般的には、まずはゲフィチニブまたはエルロチニブを投与し、その1年以内には耐性が生じるため、次にはオシメルチニブを投与し、その1年以内にはその耐性も生じるため、次にはブリガチニブを投与する。大抵の場合、その間に患者の方が副作用で参ってしまうが、分子標的薬が稼いでくれて利益が倍増している。

(原図の出典: がん化学療法センター)

進行肺がんの治療の手順



(原図の出典: NIKKEI STYLE(健康・医療), 2017年1月31日)

